

富山県 大門町

本江畠田 I 遺跡 発掘調査報告(2)

— 土地区画整理事業に伴う発掘調査報告 —

2005

大門町教育委員会



調査区全景（南から）



管玉未製品および剥片・石核

富山県 大門町

本江畠田 I 遺跡 発掘調査報告(2)

—土地区画整理事業に伴う発掘調査報告—

2005

大門町教育委員会

序

南方に丘陵地帯がそびえ、庄川が西方に流れる大門町は、その恵まれた立地から古代より多くの生活が営まれていたと考えられています。

特に庄川の扇状地には数多くの遺跡が存在しますが、現代に生きる我々にも住み良い所ゆえ開発が進み、序々に消失していることも事実であります。

私たちは、貴重な文化遺産を後世に残すことが私たちのできる最大の責務であることを理解するとともに、そのための努力を惜しんではなりません。

本調査は、本江地区土地区画整理事業に伴って消え行こうとする先達の遺産を記録として保存すること目的とし、また子孫に伝えようと、本誌にその成果を収めました。

本誌が多くの方々に読まれ、活用されて、地域の昔日の姿の解明、地域の歴史の理解と文化財保護の高揚の一助になれば幸いに存じます。

調査の終了に際し、適切な助言指導を賜りました諸先生、調査に協力をいただきました地元関係各位には、厚くお礼申し上げます。

平成17年3月

大門町教育委員会

教育長 荒井 茂昭

例　　言

1. 本書は富山県射水郡大門町本江に所在する本江畠田 I 遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、大門町教育委員会・伊勢住建株式会社・株式会社中部日本鉱業研究所の3者間で協定書を取り交わし、実施したものである。
3. 調査期間・面積
　　現地調査　　平成16年10月28日～平成16年12月24日 1346m²
　　室内整理作業　　平成16年12月28日～平成17年3月31日
4. 調査は、大門町教育委員会の監督のもと、株式会社中部日本鉱業研究所埋蔵文化財調査室 新宅輝久が担当した。
5. 本書の編集・執筆は尾野寺克実（大門町教育委員会）、新宅、藤田慎一が行った。
6. 調査から本書作成に至るまで、下記の方々からご教授、ご協力を頂いた。記して感謝いたします。
　　岡本淳一郎・金三津道子・菅田薰・中村亮仁・中野由紀子（五十音別 敬称略）
7. 本調査の参加者は以下のとおりである。

【現地調査】

泉義正・越前時男・遠藤正成・木沢義明・新保利恵・高田栄次・塚越清一・寺島笑子・中野順一・長谷一雄
藤井ふみ子・船木藤夫・前田明子・真岸与市・三島律子

【室内整理作業】

- 安立佳子・加藤由美子・北川泰子・真田恭子・新保利恵・高橋英史子・橋真理子・畠シノブ・渡辺賀世子
8. 出土品・記録資料は、大門町教育委員会にて保管している。

凡　　例

1. 方位は真北、水平基準は海拔高である。
2. 座標は公共座標を使用し、南北をX軸、東西をY軸とした。
3. 遺構の表記は次の記号を用いた。
　　S B : 挖立柱建物跡 S D : 溝跡 S E : 井戸跡 S I : 積穴建物 S K : 土坑 S P : ピット
　　P : S B の柱穴
4. 土色・土器胎土色は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修 財團法人日本色彩研究所色票監修 新版標準土色帖2001年版による。
5. 測量、および遺物実測図内の網部指示は以下のとおりである。
　　■ ■ ■ : 黄褐色シルト層による地山 ■ ■ ■ : 柱底 ■ ■ ■ : 珠洲焼断面
6. 測量・遺構実測図の縮尺は、原則として1/40を基本とし、掘立柱建物や積穴建物については1/40・1/80とする。
　　また遺物実測図の縮尺は1/3とする。それ以外は、その都度縮尺率を示した。

目 次

巻頭

序

例言

凡例

目次

I. 序章.....	1
1. 遺跡の立地.....	1
2. 調査に至る経緯.....	3
3. 調査経緯.....	3
II. 遺構と遺物.....	4
1. 調査概要.....	4
(1) 弥生時代後期後半から終末期の遺構	
① 積穴住居.....	6
a 第1号積穴建物.....	6
b 第2号積穴建物.....	6
c 第3号積穴建物.....	6
② 土坑.....	7
a 第15号土坑.....	7
b 第19号土坑.....	7
③ 溝.....	8
a 第2号溝.....	8
b 第3跡溝.....	8
c 第5号溝.....	8
d 第7号溝.....	8
(2) 弥生時代後期後半から終末期の遺物	
① 積穴建物.....	8
② 溝.....	10
③ 土坑.....	10
(3) 古墳時代の遺構と遺物	
2. 遺構と遺物.....	17
① 積穴住居.....	17
a 第5号積穴建物.....	17
(4) 中世の遺構と遺物	
① 溝跡.....	19
a 第1号溝.....	19
b 第4号溝.....	19
c 第21号溝.....	19
② 井戸.....	22
a 第1号井戸.....	22
b 第2号井戸.....	22
(5) その他の時代の遺構	
① 捜立柱建物.....	23
a 第1号捜立柱建物.....	23
b 第2号捜立柱建物.....	23
III.まとめ.....	30
IV. 自然科学分析.....	31

挿図目次

第1図 調査区位置図 (1:2500)	1
第2図 周辺遺跡及び大門町遺跡地図 (1:50000)	2
第3図 基本層序.....	4
第4図 本江畑田I遺跡 遺構全体図 (1:400)	5
第5図 S I 1・2・3遺構平面図・断面図 (1:40)	7
第6図 S I 1・2・3出土遺物実測図 (1:3)	9
第7図 SK15・19遺構平面図・断面図 (1:40)	11

第8図	S K15・19出土遺物実測図 (1:3)	12
第9図	S D 2 遺構平面図 (1:80) 断面図 (1:40)	13
第10図	S D 3・5 遺構平面図 (1:40) 断面図 (1:80)	14
第11図	S D 2・3・5 出土遺物実測図 (1:3) (1:1)	15
第12図	S D 7 遺構平面図・断面図 (1:40) 及び遺物実測図 (1:3)	16
第13図	S I 5 遺構平面図・断面図 (1:80)	17
第14図	S I 5 出土遺物実測図 (1:3)	18
第15図	S D 1・4 遺構平面図・断面図 (1:80) 及び遺物実測図	20
第16図	S D 21 遺構平面図 (1:80) 断面図 (1:40) 及び遺物実測図 (1:3)	21
第17図	井戸平面図・エレベーション図 (1:40)	22
第18図	S B 1・2 遺構平面図・断面図・エレベーション図 (1:80)	24

表 目 次

第1表	遺物観察表	25
第2表	遺構観察表①	26
第3表	遺構観察表②	27
第4表	遺構観察表③	28
第5表	遺構観察表④	29
第6表	玉・石製品観察表	29

図版目次

図版 1	調査区全景 (北から) 調査区全景 (南から)	図版 5	北側調査区全景 (北東から) S D 2 完掘 (南から)
図版 2	S I 1 完掘 (東南から) S I 2 完掘 (北東から) S I 3 完掘 (北西から)	図版 6	S B 1 全景 (南西から) S B 1 完掘 (南西から) S B 2 全景 (北西から)
図版 3	S I 5 完掘 (南から) S K15 完掘 (西から) S K19 完掘 (南から)	図版 7	遺構内出土遺物
図版 4	S D 5 完掘 (南から) S D 3 完掘 (南東から) S D 2 完掘 (東から)	図版 8	遺構内出土遺物

I 序章

1. 遺跡の立地

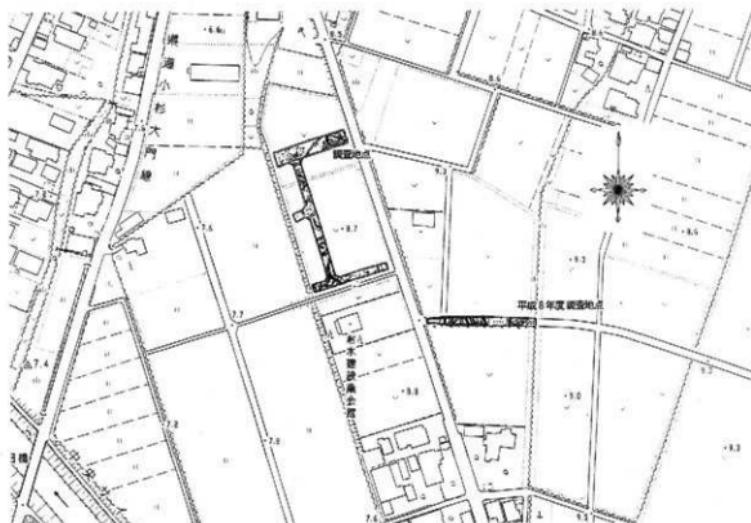
大門町は富山県の中央北部、射水平野の南西端に位置する。行政区では東は小杉町に、西・南は庄川を挟んで高岡市に、北は大島町に接している。

本江畑田Ⅰ遺跡は大門町本江地内に位置し、庄川によって形成された扇状地上に立地している。本遺跡の西には和田川が流れ、地形が段丘状にやや高まる先端部付近に位置している。

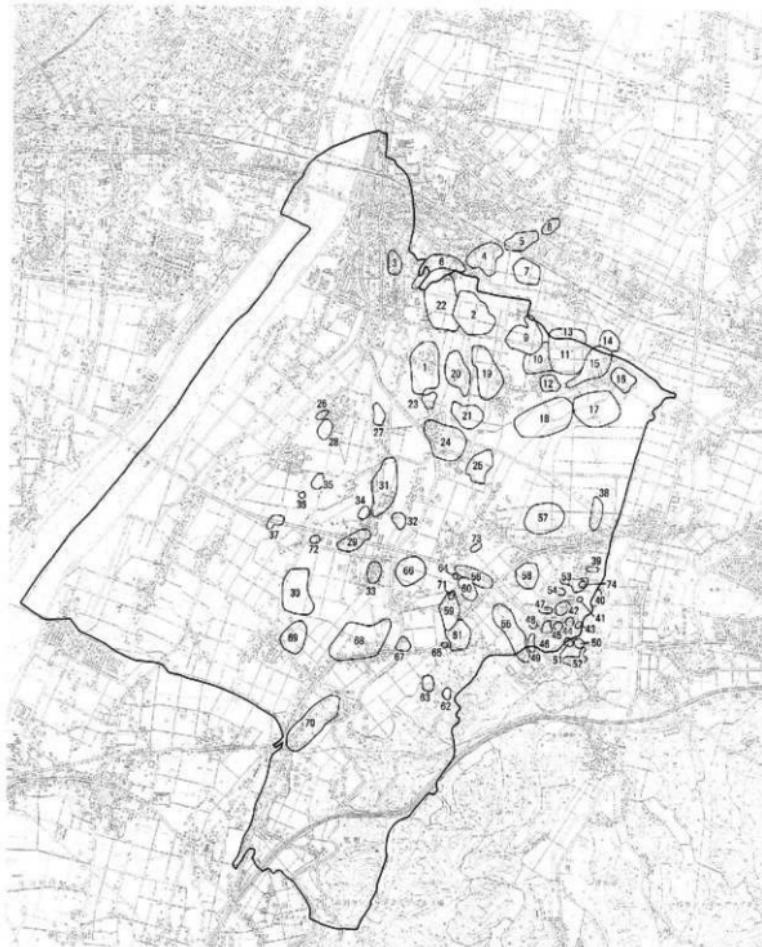
試掘結果では、弥生時代後期や古代・中世の複合遺跡として確認されている。特に弥生時代後期の包含層からは緑色凝灰岩の石核が出土しており、玉作りが行われていた集落跡の存在を示唆している。

本遺跡の周辺には、弥生時代から古墳時代という本遺跡と同時代に存在していたと考えられる遺跡が多く存在する。弥生時代後期から中世まで連續と人の営みが続く二口油免遺跡（第2図-22）をはじめ、弥生時代中期～古代までの集落遺跡である本田宮田遺跡（第2図-18）や、古墳時代集落と古代の集落とされる棚田遺跡（第2図-19）、弥生時代後期～近世の集落遺跡の本江畑田Ⅱ遺跡（第2図-23）などがそれである。さらに散布地としてあげられている遺跡を含めると、非常に遺跡が密集した地域であることがうかがえる。

（新宅）



第1図 調査区位置図 (1:2500) 大門町土地計画基本図より



第2図 周辺遺跡及び大門町遺跡地図 (1 : 50,000) 國土地理院発行地形図を基に作成

- 1 本江畠田 I 遺跡
- 2 二口五反田遺跡
- 3 二口西遺跡
- 4 八冢 C 遺跡
- 5 八冢 A 遺跡
- 6 八冢土田遺跡
- 7 八冢 B 遺跡
- 8 小林南遺跡
- 9 二口遺跡
- 10 HS-03遺跡
- 11 安吉遺跡
- 12 安吉 II 遺跡
- 13 赤井西遺跡
- 14 赤井南遺跡
- 15 本田天水遺跡
- 16 本田杉田遺跡
- 17 本田畠田遺跡
- 18 本田宮田遺跡
- 19 橋田遺跡
- 20 本江大坪 I 遺跡
- 21 本江大坪 II 遺跡
- 22 二口油免遺跡
- 23 本江畠田 II 遺跡
- 24 本江宮田遺跡
- 25 稲田遺跡
- 26 下条 A 遺跡
- 27 下条 B 遺跡
- 28 鳥前田遺跡
- 29 布目沢遺跡
- 30 布目沢 II 遺跡
- 31 布目沢北遺跡
- 32 布目沢東遺跡
- 33 布目沢苗島遺跡
- 34 横内遺跡
- 35 島鉢田遺跡
- 36 島鉢田南遺跡
- 37 小泉遺跡
- 38 水戸田遺跡
- 39 水戸田神明堂遺跡
- 40 小杉流団 No.1 遺跡
- 41 小杉流団 No.2 遺跡
- 42 小杉流団 No.3 遺跡
- 43 小杉流団 No.4 遺跡
- 44 小杉流団 No.5 遺跡
- 45 小杉流団 No.6 遺跡
- 46 小杉流団 No.7 遺跡
- 47 小杉流団 No.7 北遺跡
- 48 小杉流団 No.9 遺跡
- 49 小杉流団 No.11 遺跡
- 50 小杉流団 No.15 遺跡
- 51 小杉流団 No.17 遺跡
- 52 小杉流団 No.18 遺跡
- 53 小杉流団周辺 C 遺跡
- 54 小杉流団周辺 D 遺跡
- 55 小杉丸山遺跡
- 56 生源寺遺跡
- 57 生源寺 II 遺跡
- 58 生源寺 III 遺跡
- 59 生源寺新 B 遺跡
- 60 生源寺新 C 遺跡
- 61 生源寺新 D 遺跡
- 62 生源寺南古墳
- 63 生源寺南遺跡
- 64 生源寺新十三塚 遺跡
- 65 南郷中学南古墳
- 66 市井弘田遺跡
- 67 土池遺跡
- 68 荒町遺跡
- 69 本村遺跡
- 70 串田新遺跡
- 71 大谷古墳
- 72 牧田遺跡
- 73 市井東遺跡
- 74 石名山墓跡

2. 調査に至る経緯（本江区画整理）

伊勢住建株式会社外は、平成15年度より大門町本江地内で区画整理事業を計画した。事業は、計画地区内約7haを対象に235区画に整理、分譲するもので、平成16年度に着工することとなった。

町教育委員会は、平成7年度に実施した試掘調査[大門町教育委員会1997]によって、事業計画地の一部である庄川の河岸段丘上約1haに埋蔵文化財包蔵地が良好に遺存することを確認しており、その保存について事業者と協議を重ねてきた。

その結果、宅地部分はなるべく盛土保存を実施するよう要請しながら、今後個別に協議することを約し、今年度施工する包蔵地内の区画道路は、保護措置が不可能なため、本調査を実施して記録保存することとなった。

(尾野寺)

3. 調査経緯

調査は平成16年10月26日から調査区の境界測量を行い、同日に重機による表土はぎを開始した。試掘結果では、本遺跡は古代・中世の面（上層）と弥生・古墳時代の面（下層）の2層からなる複合遺跡とされていたが、今回の調査地点は上層が後世の擾乱を受けたため、下層の面の調査のみとなった。重機掘削は北側の調査区より開始し、29日まで行った。その後11月1日より、人力による排水溝掘削作業や遺構検出作業へと調査は移行した。

遺構検出の結果、調査区北側では中世の区画溝や井戸跡などを検出した。これら中世の遺構は遺構検出面が後世の擾乱を受けほぼ消滅している中で、遺構の深さがあったものが確認できたと考えられる。また調査区南側では、堅穴建物や溝、土坑など弥生時代後期後半～古墳時代前期の遺構を中心に検出し、さらに管玉の未製品や石核や剥片、砥石などが出土した。そのため遺構の覆土はすべて土壤洗浄機にかけ、未製品の採取に努めた。遺構掘削は、11月2日から12月16日までを行い、翌日からラジコンヘリコプターによる航空写真測量の準備を行った。航空写真測量は18日に行なった。その後機材撤収などを行って、12月24日には屋外調査は終了した。

遺物整理作業・報告書作成作業は、1月4日から出土遺物の洗浄・注記を開始し、遺物実測や版下トレース作業を行った。文章執筆作業は遺物整理作業がほぼ終了した段階で開始し、3月31日には報告書を刊行した。

(新宅)

II 遺構と遺物

1. 調査概要

本江畠1遺跡は、住宅団地建設に伴う区画道路の調査である。そのため調査区は工字形を呈しており、調査面積は1,346m²であった。

本遺跡は、試掘結果や平成8年度の本調査(尾野寺 1997)から、古代・中世・弥生時代・古墳時代の2層の文化層を確認していた。しかし今回の調査地点については、圓場整備時の擾乱を受けており、包含層が皆無であった事が試掘結果から確認されていたため、最終面である弥生時代・古墳時代の層を中心とした調査となつた。

調査は重機による表土・包含層削削を行い、一部包含層が残る部分については、細心の注意を払いながら行った。旧地形は、全般的に南方向から北方向へ緩やかに下る。

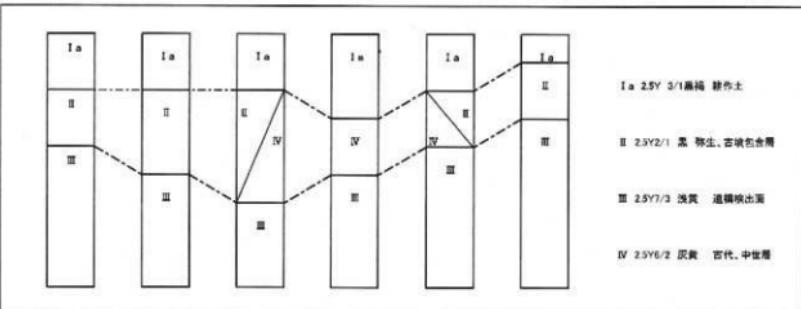
基本層序は、調査区の一部に後世の擾乱を受けていない箇所があり、その部分では第IV層(古代・中世)が見られたものの、概ね第I層の耕作土・第II層の包含層(弥生時代・古墳時代)と遺構検出面の(弥生時代・古墳時代)第III層から成っていた。南方向の周辺よりやや標高が高い方へ行くに従い、第II層の包含層(弥生時代・古墳時代)は薄く、やがて消滅し、田面から0.15m~0.30mの深さで第III層の遺構検出面に至ってしまう。

人力による遺構検出の結果、試掘結果どおり、弥生時代後期から古墳時代前期を中心に、中世の遺構も確認した。検出した遺構は、竪穴建物4棟・掘立柱建物2棟・井戸2基・土抗19基・溝29条・ピット多數である。

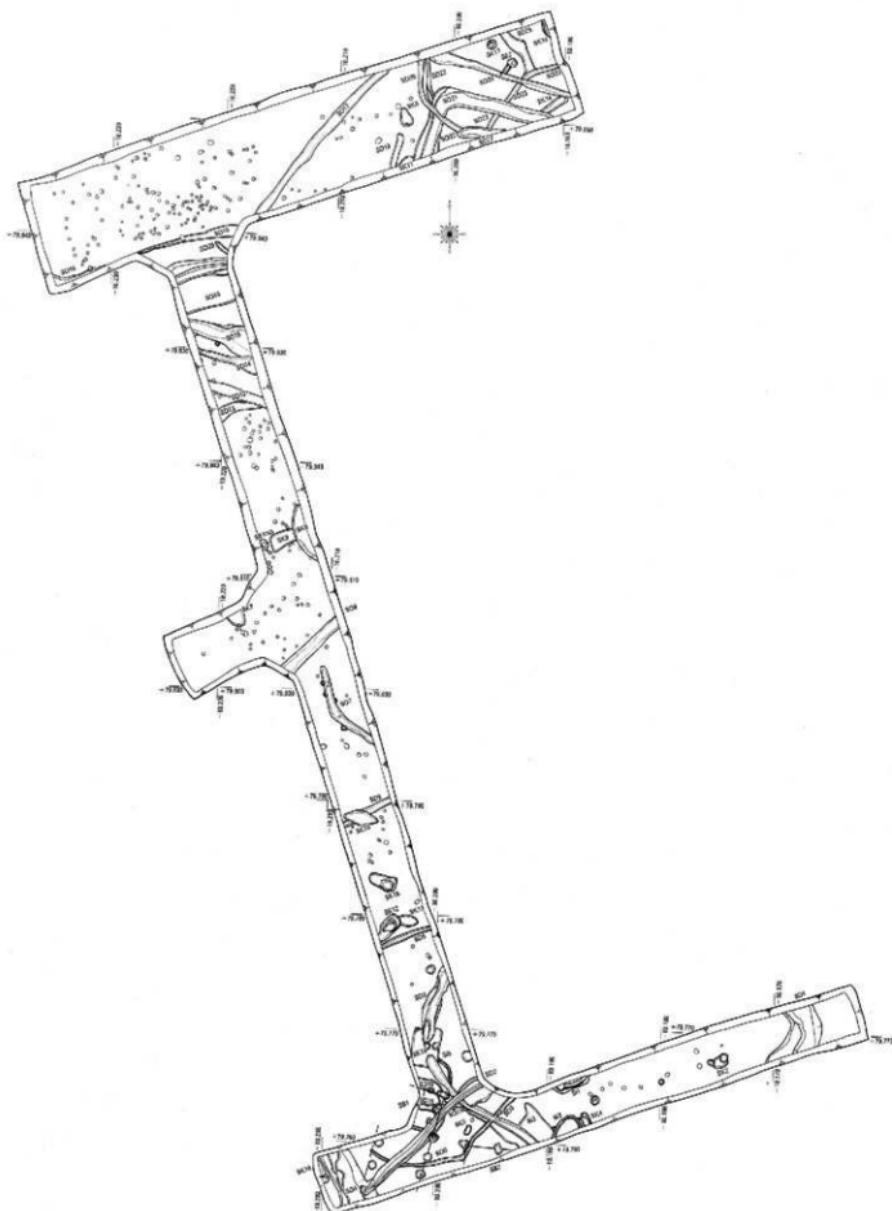
遺構の分布は時代別にその配置に偏りが見られ、調査区北東隅側と南側に集中する傾向が見られた。特に竪穴建物などは調査区南側に集中する。

竪穴建物や溝からは玉作闇巡の遺物が多く出土したため、剥片などが出土した遺構の覆土はすべて土壤洗浄を行い、採取に努めた。その結果、土囊袋約700袋分のサンプルから、菅玉の未製品や剥片・石核などを採取することができた。しかし製品の出土ではなく、また竪穴建物など、深度の浅い遺構から出土した未製品は、遺構との関連性が不明瞭で、玉作りをそれらの遺構で行っていたとは断定するに至っていないものの、この周辺に玉作り工房が存在する事は、確実である事が明らかとなつた。

中世の遺構は、調査区北側を中心に確認でき、その多くは溝である。溝は直角に折れ曲がるものがあり、区画を意識したものと考えられる。



第3図 基本層序



第4図 本江畠田Ⅰ遺跡 遺構全体図 (1:400)

2. 遺構と遺物

(1) 弥生時代後期後半から終末期の遺構

①堅穴建物

本遺跡で検出した堅穴建物は合計4棟である。この中で出土遺物から本時期にあたる遺構は3棟であった。床面積などの規模は、全体像が明確なものはないものの、他遺跡で見られる同時期の建物と比較するとやや小規模のものといえる。

a 第1号堅穴建物 S I 1 (第4図)

調査区南側で検出した堅穴建物である。遺構の大部分は調査区域外へ広がっているが、壁溝の検出状況や覆土の断面観察から3回の建て替え、ないしは作り替えが見られた。平面形は方形で、確認できた範囲での床面積は 0.15m^2 であった。炉跡や柱穴は確認されていない。また、堅穴建物隅にはピットが存在するが、貯蔵穴といった付属施設になるかは不明である。

出土遺物は、弥生土器の甕や高坏、菅玉未製品、緑色凝灰岩剥片や石核が覆土中より出土した。

b 第2号堅穴建物 S I 2 (第4図)

調査区南側で検出した堅穴建物である。遺構の大部分は調査区域外へ広がり、S I 3と新旧関係を持つものの、遺構自体の深さが浅かった事から明確な切り合いを観察する事ができず、規模も不明瞭である。平面形は方形であり、確認できた範囲での床面積は 0.25m^2 であった。炉跡や柱穴は確認されていないが、壁周溝は検出できた。

遺物は、遺構自身の深さがさほど無かったものの、長頸甕がほぼ床面直上から出土した。

c 第3号堅穴建物 S I 3 (第4図)

調査区南側で検出した堅穴建物である。遺構の大部分は調査区域外へ広がり、S I 2と新旧関係を持つものの、遺構自身の深さが浅かった事と、遺構西側が大きく削平を受けていたため、明確に切り合いを観察する事ができず、さらに規模も不明瞭である。SD 3とも新旧関係が見られ、こちらはSD 3に切られる。平面形は方形であるものの、先にも述べたが遺構は西側で大きく削平を受けている為、規模は不明である。確認できた範囲での床面積は 4.75m^2 であった。炉跡や柱穴の確認されていない。

遺物の出土状況は床面直上から比較的一カ所に集中する形で甕や鉢、高坏、緑色凝灰岩剥片などが出土している。玉作りの可能性は明確ではなく、SD 3からの覆土の流れ込みと考えられる。

②土坑

a 第15号土坑 SK 15 (第7図)

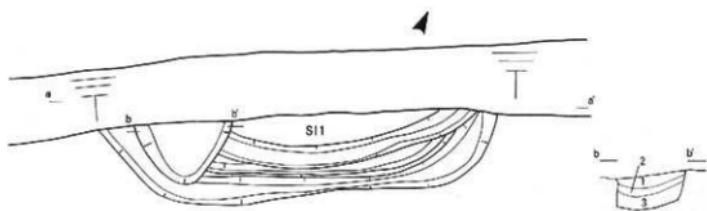
調査区南側で検出した土坑である。S I 7を切る形であった。規模は長軸 2.5m ・短軸 1.27m であり、平面形は長方形を呈する。

遺物の出土は土坑底部より、ミニチュア土器や高坏が出土している。

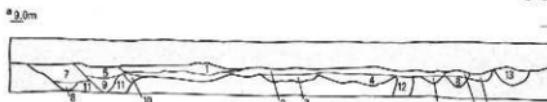
b 第19号土坑 SK 19 (第7図)

調査区南側で検出した土坑である。S I 5とSD 3に切られる形で検出した。規模は長軸 3.4m ・短軸 2.48m であり、平面形状は方形である。

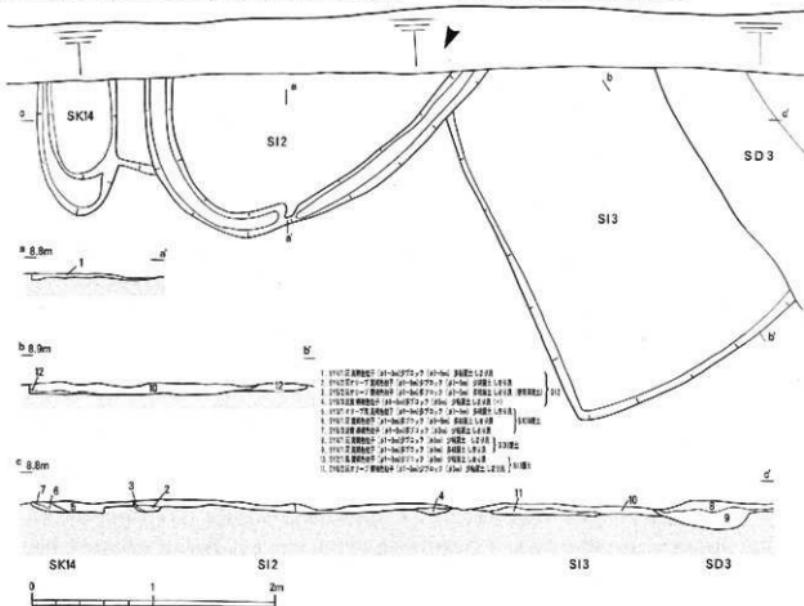
遺物は、覆土中から散発的に出土し、特に規則性は見られなかった。覆土からは、土器片の他に緑色凝灰岩の剥片などが出土しているものの、遺構の深さがなかった事から遺物の流れ込みの可能性もあり、玉作りの可能性は明確ではない。



1. 10Y R2/1 黒 貫褐色粒子 (φ1~3mm)少 同色ブロック (φ5mm)少 粘質土 しまり良
 2. 10Y R2/1 黒 貫褐色粒子 (φ1~3mm)少 同色ブロック (φ10mm)多 粘質土 しまり良
 3. 10Y R4/1 黒 貫褐色粒子 (φ3mm)少 同色ブロック (φ10mm)少 シルト しまり良
 4. 10Y R4/1 黒 貫褐色粒子 (φ3~5mm)少 同色ブロック (φ10~15mm)少 シルト しまり良
 5. 10Y R5/1 黒 貫褐色粒子 (φ3~5mm)少 同色ブロック (φ10~15mm)少 シルト しまり良
 6. 10Y R5/1 黒 貫褐色粒子 (φ3~5mm)少 同色ブロック (φ15~25mm)少 シルト しまり良
 7. 10Y R6/3 黒 貫褐色粒子 (φ3~5mm)少 粘質土 しまり良



1. 10Y R2/1 黒 貫褐色粒子 (φ1~3mm)同色ブロック (φ5~10mm)多 粘質土 しまり良
 2. 10Y R2/1 黒 貫褐色粒子 (φ1~3mm)少 同色ブロック (φ10mm)多 粘質土 しまり良
 3. 10Y R4/1 黒 貫褐色粒子 (φ3mm)少 同色ブロック (φ10mm)少 シルト しまり良
 4. 10Y R4/1 黒 貯褐色粒子 (φ3~5mm)少 同色ブロック (φ10~15mm)少 シルト しまり良
 5. 10Y R5/1 黒 貯褐色粒子 (φ3~5mm)少 同色ブロック (φ10~15mm)少 シルト しまり良
 6. 10Y R5/1 黒 貯褐色粒子 (φ3~5mm)少 同色ブロック (φ15~25mm)少 シルト しまり良
 7. 10Y R6/3 黒 貯褐色粒子 (φ3~5mm)少 粘質土 しまり良
 8. 10Y R5/2 黑褐 貯褐色粒子 (φ3~5mm)少 シルト しまり良 (高堅度)
 9. 10Y R5/2 黑褐 貯褐色粒子 (φ3~5mm)少 同色ブロック (φ5~10mm)少 シルト しまり良 (高堅度)
 10. 10Y R4/2 黑褐 貯褐色粒子 (φ3~5mm)少 同色ブロック (φ5mm)少 シルト しまり良 (高堅度)
 11. 10Y R4/2 黑褐 貯褐色粒子 (φ3~5mm)少 同色ブロック (φ5~10mm)少 シルト しまり良 (粘灰?)
 12. 10Y R5/3 黑褐 貯褐色粒子 (φ3~5mm)少 粘質土 しまり良
 13. 10Y R2/1 黑褐 貯褐色粒子 (φ3mm)少 粘質土 しまり良
 14. 10Y R4/1 黑褐 貯褐色粒子 (φ3mm)少 粘質土 しまり良



第5図 SI 1・2・3 遺構平面図・断面図 (1:40)

③溝（第9・10・12図）

この時期に該当する溝で、遺物が多く出土した溝は4条あった。

a 第2号溝 SD2（第9図）

調査区南側で検出した溝である。南西・北東方向に走り南西側ではS B 1、SD 4に切られ、北東方向では調査区域外へ広がる。また、S I 5、SD 3、5、10、11を切る。確認できる範囲での全長は14.4m、最大幅0.9m、深さ0.79mを測る。覆土の堆積は人為堆積であり、南西側で掘り直しが見られた。

遺物は覆土より有段口縁甕などが出土している。

b 第3号溝 SD3（第10図）

調査区南側で検出した溝である。溝は一部で途切れ、そこを中心に南南西方向と、北東方向へ弧を描く様に伸び、各々は調査区域外へ広がる。新旧関係はS I 4・5、SD 2に切られ、S I 3、SD 5を切る形であった。確認できる範囲での全長は18.9m、最大幅1.15m、深さ0.33mを測る。

遺物は底面よりやや浮いた形で、有段口縁甕や壺・高坏・器台・砥石などが出土している。さらに青玉の未製品や剥片なども覆土中より多く見られた。

c 第5号溝 SD5（第10図）

調査区南側で検出した溝である。西側から始まり、弧の字を描く様に東方向に向かい、調査区域外へ広がる。新旧関係はSD 2・3に切られる形であった。確認できる範囲での全長は15.5m、最大幅0.5m、深さ0.1mを測る。

遺物は有段口縁甕や壺・高坏などが底面よりやや浮いた形で出土した。

d 第7号溝 SD9（第12図）

調査区中央で検出した溝である。東南一北方向へ屈曲して走る。他遺構との新旧関係は小ピットにあるものの、全て切る形であった。確認できる範囲での全長は8.5m、最大幅0.9m、深さ0.29mを測る。

遺物は少量見られ、底面よりやや浮いた形での出土である。

（新宅）

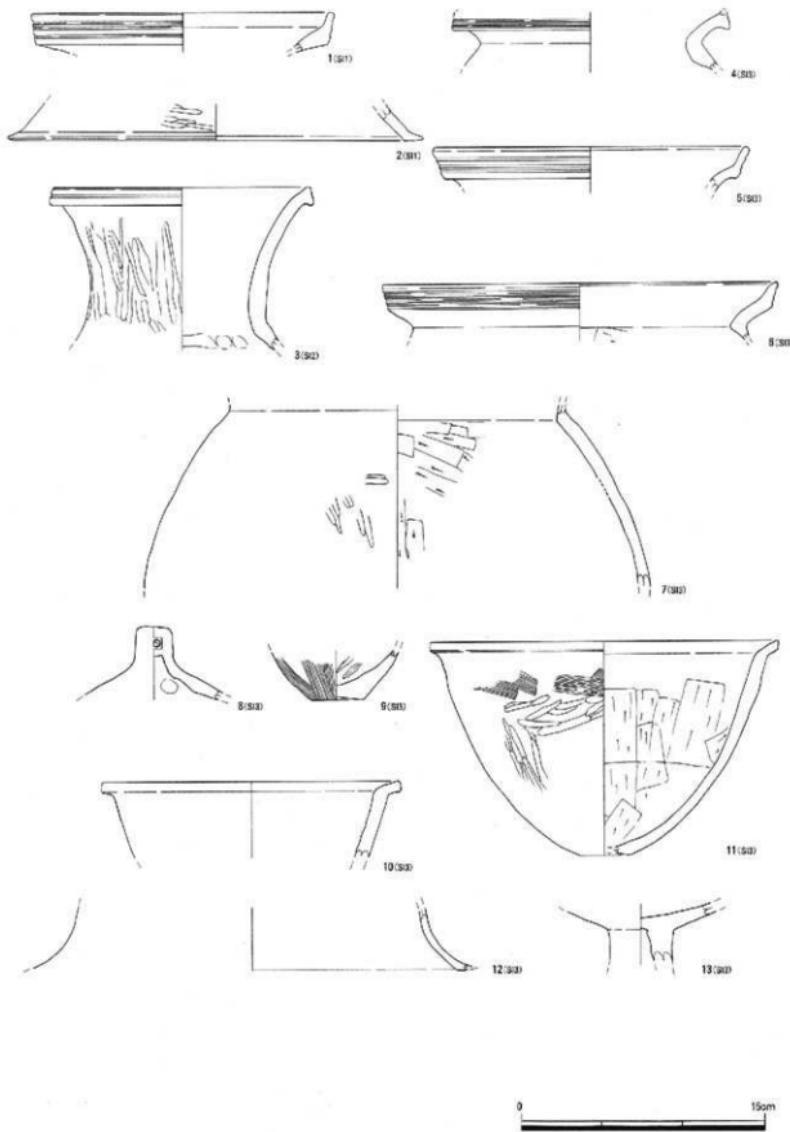
（2）弥生時代後期後半から終末期の遺物

①堅穴建物（第6図1～13）

S I 1からは壺・高坏が出土している。壺（1）は、口縁部のみの出土であり、短く立ち上る口縁帯に3条の擬凹線を巡らせている。また、赤彩と考えられる付着物が見られる。高坏（2）は裾部のみの出土であり、裾の接地部分に面取りがなされている。調整は外面にミガキを施す。時期は壺、高坏ともに月影式段階に位置づけられる。

S I 2からは壺が出土している。壺（3）は広口長頸壺であり、頸部は肩部より上方に向かって外反し、断面三角形の短い口縁帯が付く。口縁帯には2ないし、3条の擬凹線を巡らせている。調整は頸部外面にタテ方向のミガキを密に施す。時期は月影式段階に位置づけられる。

S I 3は甕・壺・鉢・高坏が出土している。4・5・6は、甕の口縁部のみの出土で、頸部が屈曲し、口縁部に段を作り出すものである。4は口縁部がやや内傾して断面三角形を呈し、2条の擬凹線を巡らせている。5・6は口縁部が外傾するもので、共に3条の擬凹線を巡らせている。7は甕あるいは壺の体部上半と考えられる。調整は外面にミガキ、内面にはケズリを施す。8は壺である。摘みに穿孔が施されている。9は甕の底部と考えられる。10・11は鉢である。11は端部を僅かに外反させて口縁部を形成するもので、調整は外面にハケメおよびミガキ、内面にはタテ方向のケズリを施す。12は高坏の裾部である。形状と大きさから有段高坏の一部と考えられる。13は高坏の坏部、脚部の接合部分であり、やや小型のものと考えられる。帰属時期については甕、鉢、12の高坏については法仏式段階、他は新しい様相を示すものと考えられる。



第6図 SI1・2・3出土遺物実測図(1:3)

②土坑（第8図1～10）

S K15からは高坏・ミニチュア製品が出土している。高坏（1）は脚部のみの出土で、裾部は段をなし、外反して大きく聞くものである。裾部全体に11条の擬凹線を巡らせている。ミニチュア製品（2）は底部から上方へとやや開きながら摘み上げたものである。調整は内面にハケメ調整がなされるが、外面には指頭圧痕が残る。時期は高坏から月影式段階と考えられる。

S K19からは甕・壺・器台・高坏が出土している。甕は頸部をやや窪めて段をつくり、直線的に口縁部が立ち上がるものの（3・4）と頸部が長く外反し、外傾して伸展する口縁部を付くもの（5）とがある。壺（6）は頸部に刻み日が施された突帯が付くもので、外面には赤彩が施されている。器台（7）は受部のみの出土で、伸展して外傾する口縁部に擬凹線が巡らされる。高坏（9・10）は9は坏部のみ、10は裾部のみの出土である。ともに大型高坏の一部と考えられる。出土土器の帰属時期としては伸展する口縁部をもつ甕や器台が出土し、大型高坏の一部と考えられる破片も見られることから、月影式段階に位置づけられる。

③溝（第11図1～21、第12図1～7）

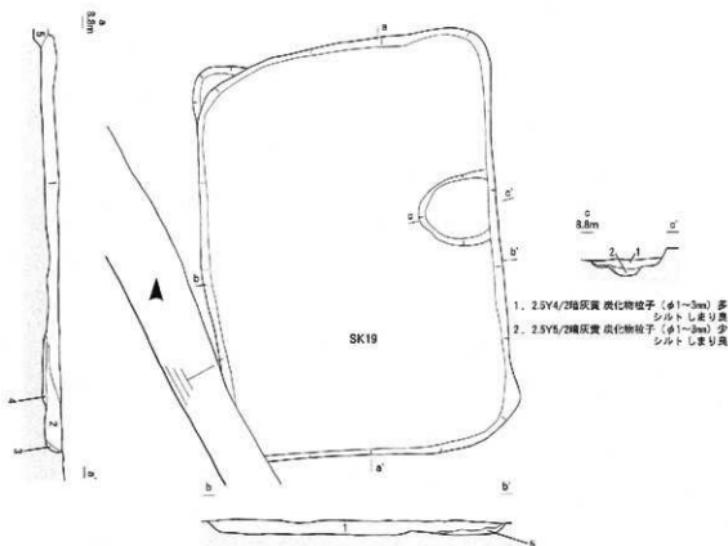
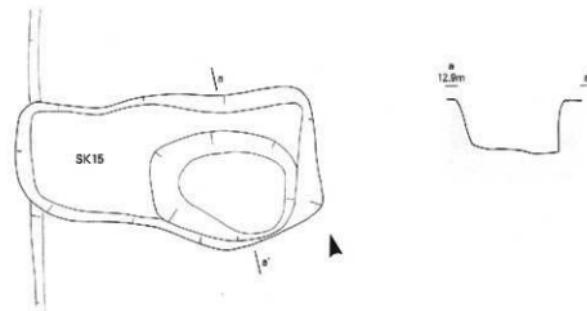
S D2からは甕が出土している。短く外反する頸部に伸展する口縁部がつくもの（1）と、くの字状の口縁をもつものの（2）とが見られる。時期は月影式段階以降と考えられる。

S D3からは甕・壺・器台・高坏・鉢・ミニチュア製品、管玉未製品・砥石が出土している。甕（5）は口縁部の中位で内傾して、くの字状になる。甕（6）は頸部で外反し、伸展する口縁を有するもので、口縁帶には4条の擬凹線を巡らせている。甕（7・9）は頸部で外反して、短い無文の口縁部が付く。器台（8）は受部の口縁であり、8は外傾して伸展する口縁部で多条の擬凹線を巡らせている。器台（10）は短い口縁部を有するものである。壺（11）は、広口長頸甕であり、頸部は肩部より上方に向かって外反し、断面三角形の短い口縁帶が付くものである。口縁帶には、3条の擬凹線を巡らせている。調整は頸部外面にタテ方向のハケメの後、ミガキを、内面は頸部にヨコ方向のハケメ、体部との接合部から下部にはヨコ方向のケズリを施す。高坏（12）は坏部のみの出土で、坏底部より外側上方へと直線的に伸びるものであり、口縁部は底部との境で屈曲し、外反して伸展する。調整は内外面とともにミガキが施される。器台（13）は脚の有段部分が残存する。ミニチュア製品（14）は底部から上方へとやや開きながら摘み上げたものである。管玉未製品（18・19）は穿孔作業時に失敗したものと考えられる。輕石（20）は玉を研磨するために使用したと考えられ、穿孔後の管玉を磨いた痕跡が看取できる。これらの帰属時期としては概ね月影式段階と考えられるが、高坏（12）については古い様相を呈していると考えられる。

S D5からは甕・壺・高坏が出土している。甕（15）は頸部が外反して、伸展する口縁部をもつもので、4条の擬凹線を巡らせている。壺（16）は大型で、やや内傾して立ち上がる頸部に短い口縁部が付くものである。高坏（17）は脚部のみの出土で裾部が緩やかに聞く小型のものである。調整は外面にミガキが施される。甕（21）は壺の底部である可能性も伺える。底面に×の記号が刻まれている。帰属時期としては月影式段階が主体と考えられる。

S D7からは甕・器台・高坏が出土している。甕（12-1）は頸部がやや窪めた程度に屈曲し、口縁部は伸展して直立するものである。口縁部の下部は、ナデによって突出がつくりだされている。甕（12-2）は頸部が外反し、口縁部が外傾して伸展する有段口縁の甕である。口縁帶は無文である。器台（12-3）は受部のみの出土で、伸展して外傾する口縁部を有するものである。12-4・5は甕の底部と考えられる。高坏（12-6）は裾部のみの出土である。大型のものと考えられ、大きく広がり、接合部分は外傾して立ち上がるかえりが付く。高坏（12-7）は坏部のみの出土である。坏底部より外側上方へと直線的に伸びるものであり、口縁部は底部との境で屈曲し、外反して伸展する。調整は内外面とともにミガキがなされる。帰属時期については、概ね月影式段階に位置づけられるが、7については、やや古い様相を呈しており、法仏式段階に位置づけられる。

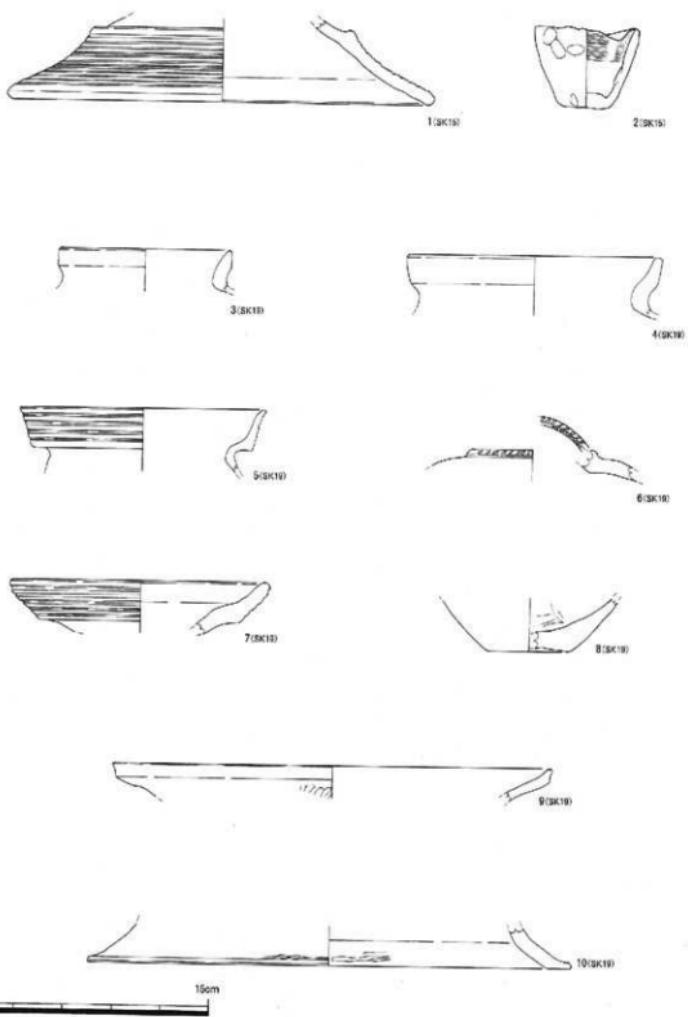
（藤田）



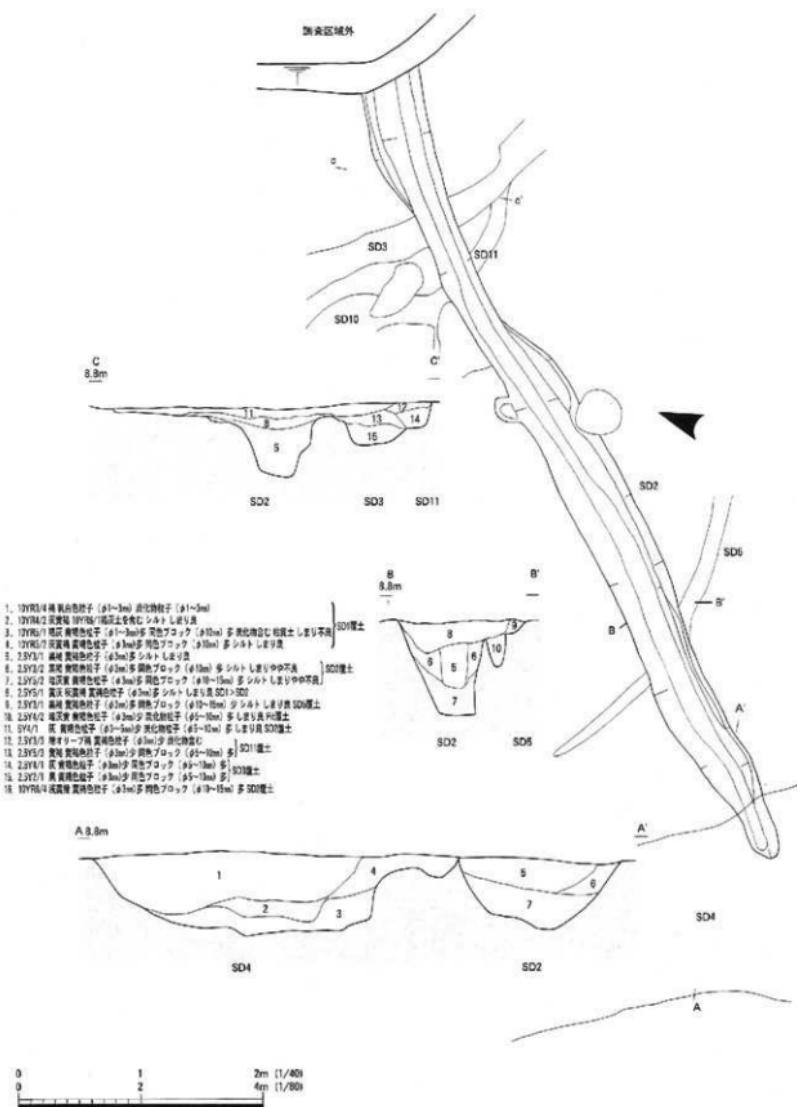
- 10YR4/1褐色 黄褐色粒子 (φ1~3mm) 少 黄色ブロック (φ5~10mm) 多 黄化物粒子 (φ1~3mm) 多 シルトしまり良
2. 10YR5/1褐色 黄褐色粒子 (φ1~3mm) 少 黄色ブロック (φ5~10mm) 多 シルトしまり良
3. 10YR6/2灰黒色 黄褐色粒子 (φ1~3mm) 多 シルトしまり良
4. 10YR6/3にしい青棕 黄褐色粒子 (φ1~3mm) 多 黄色ブロック (φ5~10mm) 多 シルトしまり良 SD3覆土
5. 10YR2/1黑 黄褐色粒子 (φ3mm) 多 黄色ブロック (φ5mm) 多 粘土質しまりやや良 SD3覆土



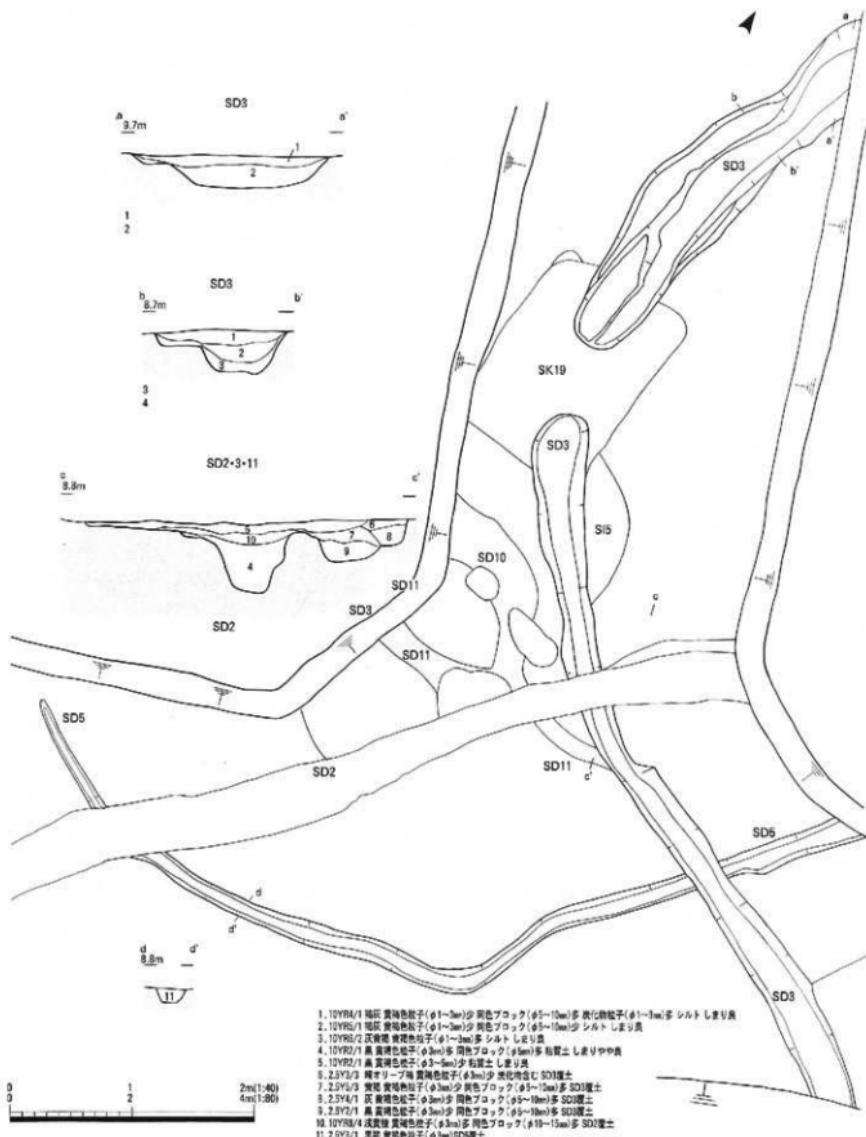
第7図 SK15・19造構平面図・断面図 (1:40)



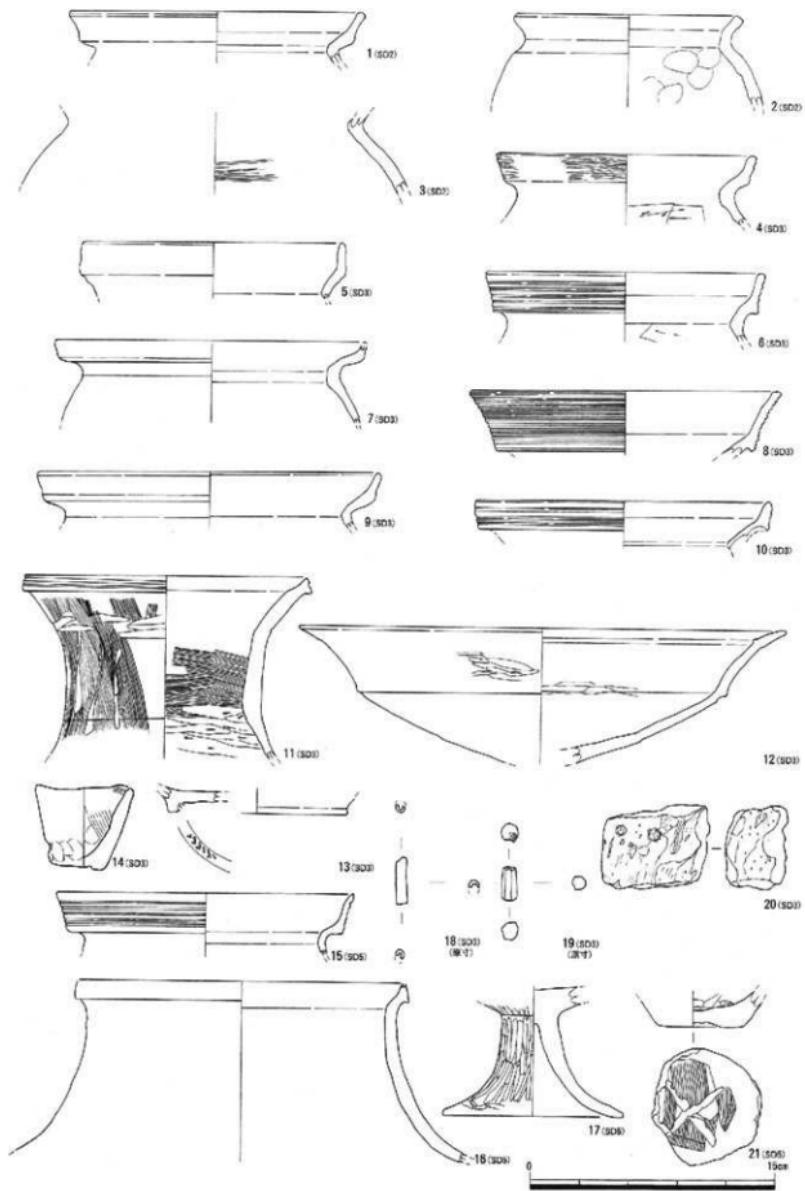
第8図 SK15・19出土遺物実測図 (1 : 3)



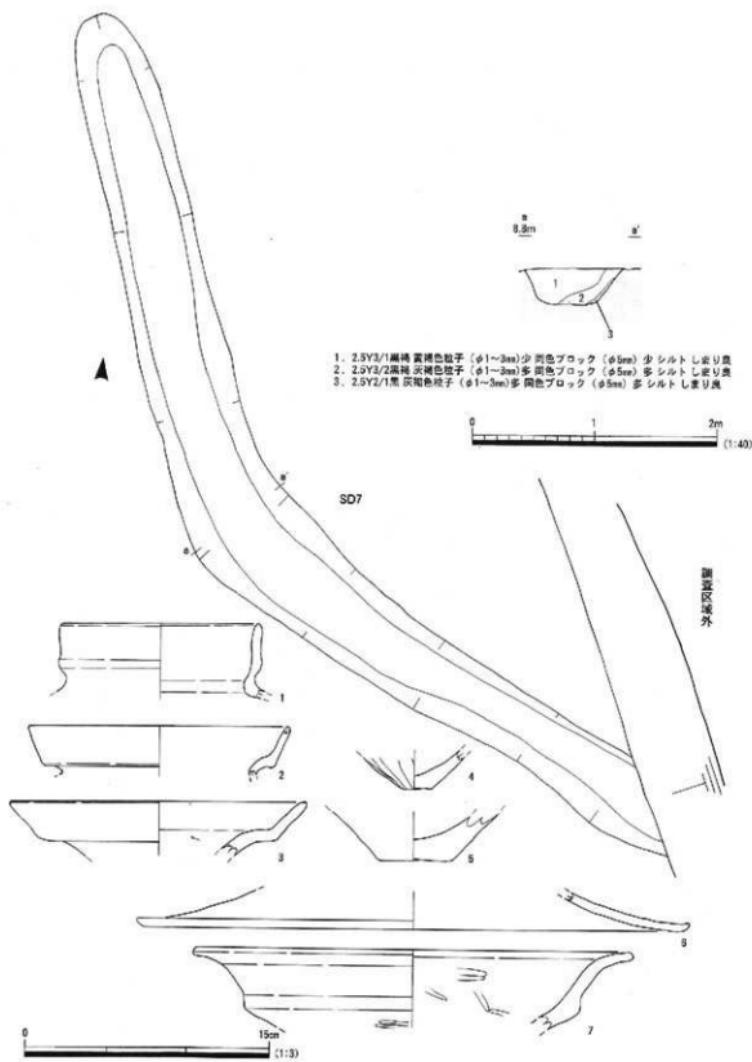
第9図 SD 2 遺構平面図 (1:80) 断面図 (1:40)



第10図 SD 3・5構造平面図(1:40)断面図(1:80)



第11図 SD 2・3・5 出土遺物実測図 (1:3) (1:1)



第12図 SD7 造構平面図・断面図 (1:40) 及び遺物実測図 (1:3)

(3) 古墳時代の遺構と遺物

この時代の遺構は主に竪穴建物1棟や溝1条、土坑、ピットなどがある。

① 竪穴建物

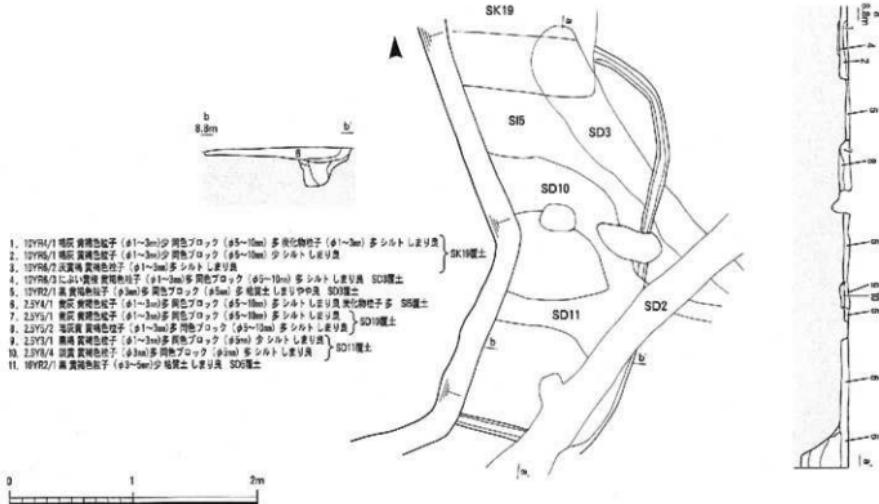
a 第5号竪穴建物 S I 5 (第13・14図)

調査区南側で検出した竪穴建物である。遺構の一部は調査区域外への広がりが見られたものの、平面形は方形である事は確認できた。遺構間の新旧関係はS B 1、SD 10、11に切られ、SD 2、3、SK 19を切る形であった。床面積は14.99m²であり、長軸5.00m・短軸2.12mを測る。床は貼り床ではなく、炉跡や貯蔵穴は確認できなかったものの、壁際には摸周溝が見られ、遺構覆土には炭化物、および焼上粒子が顯著に混入していた。

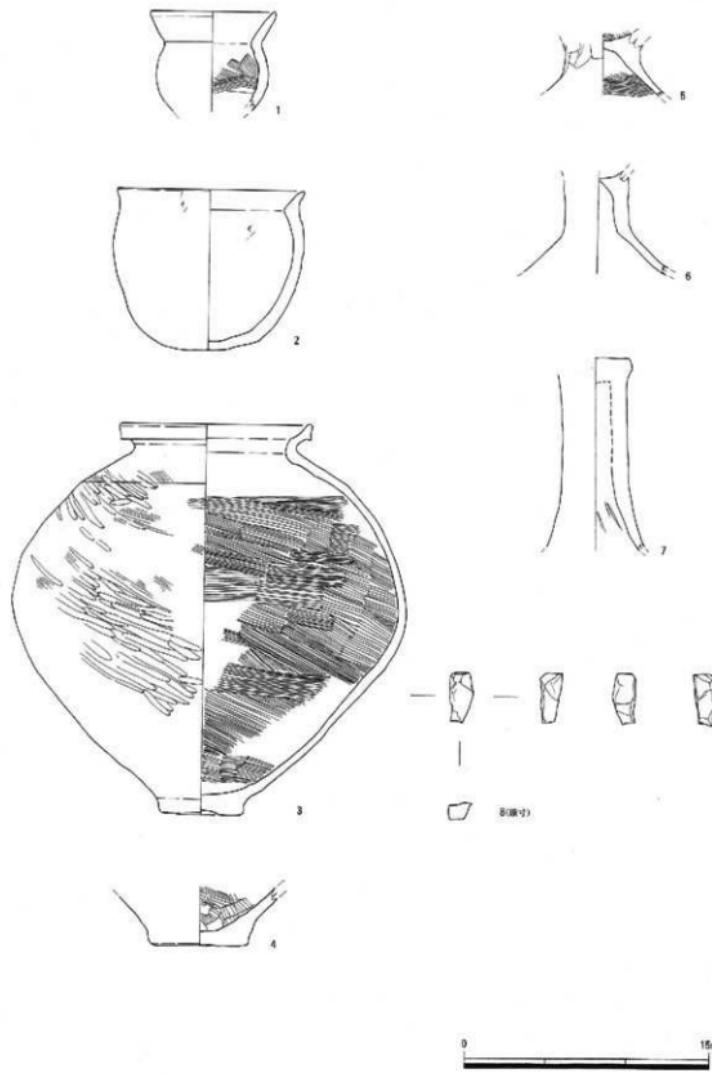
遺物は床面直上より甕・小型壺・高环などが出土している。緑色凝灰岩の剥片も出土しているが、ごく少量であり、流れ込みと考えられる。土器類も遺構深度が浅く、時期的にも一定でない部分もあることから、これらも流れ込みの可能性が強いものと考えられる。しかし、出土遺物の時期の下限から、この時期に据えて置くこととする。(新宅)

遺物は概ね、古墳時代前期のものと考えられるが、7については、弥生時代終末期の可能性が高い。1は小型の壺である。頸部の屈曲が緩やかであり、口縁部が最大径をなす。調整は内面にハケメ調整を施す。2は、小型の鉢である。頸部をわずかに屈曲させ、短い口縁部を形成するものである。3は壺である。頸部は屈曲して短い口縁帯が付く。体部は中位で最大径となり、平底の底部に向かって緩やかにすぼまっていくものである。調整は外面上にはハケメ調整を行った後にミガキを、内面は密にヨコあるいはナナメ方向のハケメを施す。5・6・7は高环の脚部である。5は环部との接合部よりハの字に開く。6は短い脚にハの字に開く脚部が付く。7はやや棒状を呈しており、他の土器より古い様相が看守出来る。8は緑色凝灰岩の剥片である。荒削段階で生じたものと考えられる。

(藤田)



第13図 SI 5 遺構平面図・断面図 (1:80)



第14図 SI 5 出土遺物実測図 (1 : 3)

(4) 中世の遺構と遺物

①溝

a 第1号溝 SD1 (第15図)

調査区南側東南隅で検出した溝である。溝はやや南西方向に屈曲し、南西側でテラス状の平坦面をつくる。溝の両端は、調査区域外への広がりが見られるため全体像は不明である。確認できた範囲での規模は全長3.8m・最大幅3.0mをはかる。

遺物は覆土中層より出土している。遺物は珠洲焼の擂鉢（第15図-1）、須恵器の甕の口縁部（第15図-2）などが出土している。擂鉢は体部のみの出土であり、鉢目なども見られなかった。甕は口縁部のみの出土であり、口縁端部は屈曲して挽き出している。遺物の出土はこれのみであり、遺構の時期は不明ながらも中世期の遺物が見られる為ここに記す。

b 第4号溝 SD4 (第15図)

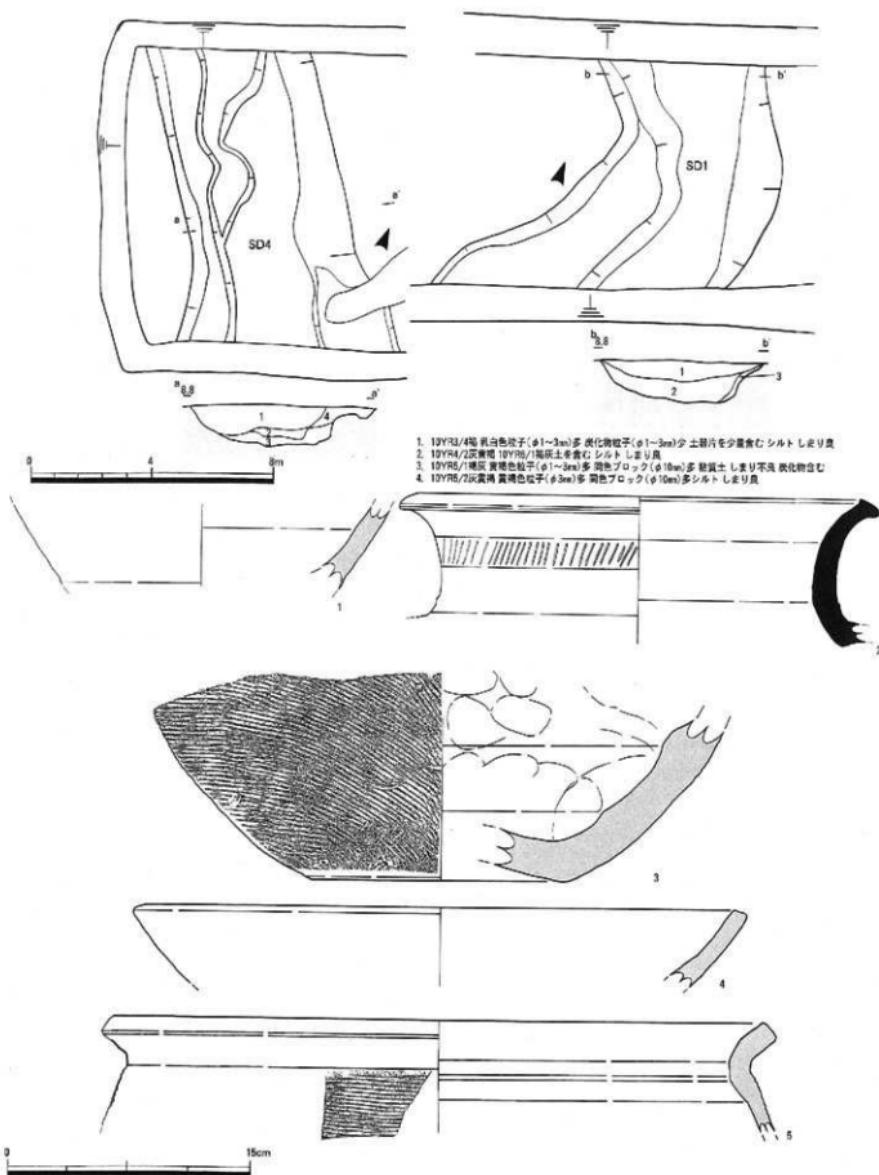
調査区南側西隅で検出した溝である。溝はほぼ直線的に検出し、溝の両端はそれぞれ調査区域外への広がりが見られるため、全体像は不明である。確認できた範囲での規模は、全長4.75m・最大幅3.5mをはかる。遺構間の前後関係は、SD2を切る形であった。

遺物は、ごく少量ではあったが、覆土中層より出土している。遺物は珠洲焼の擂鉢（第15図-4）や甕底部（第15図-3）や、口縁部などが出土している（第15-5）などが見られた。特に擂鉢は鉢目は見られなかったが、口縁端部はやや外傾し、シャープな仕上げであった。擂鉢から吉岡編年（吉岡 1994）Ⅱ～Ⅲ期頃と考えられる

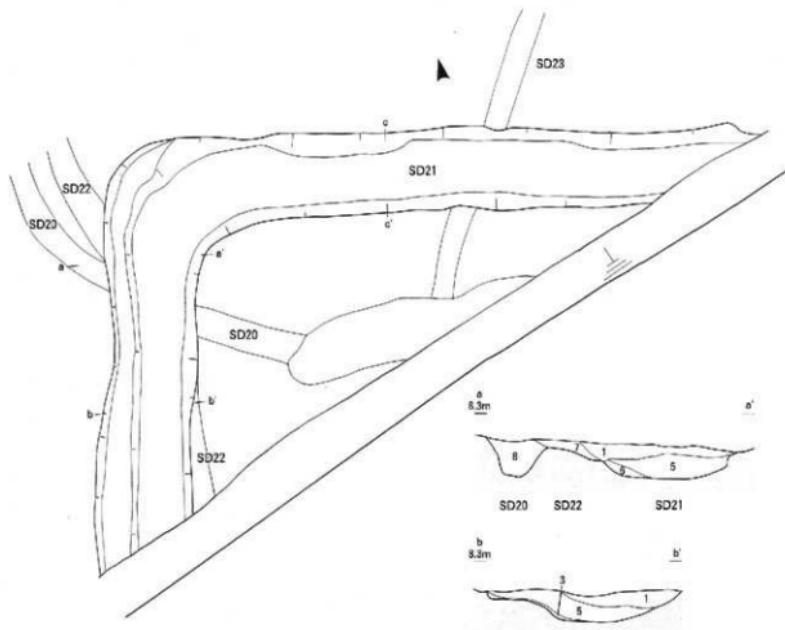
c 第21号溝 SD21 (第16図)

調査区北側で検出した溝である。溝は方形に区画する様に立地し、調査区域外への広がりが見られたため、全体像は不明である。確認できた範囲での規模は全長12.1m・最大幅1.8mをはかる。遺構間の新旧関係はSD20・22・23を切る形であった。溝は東側の一辺にテラス状の平坦面が見られたものの、拡張や掘り直しといったものは土層観察からは確認できなかった。方形区画された溝の内側には、建物跡などの施設は見られなかった。

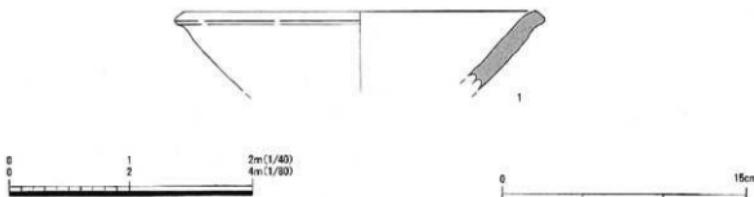
遺物の出土は時期のわかるものは、珠洲焼の擂鉢1点のみであった。擂鉢は、口縁端部がやや外傾し、シャープな仕上げである。吉岡編年Ⅱ～Ⅲ期頃と考えられる。



第15図 SD 1・4 遺構平面図・断面図 (1:80) 及び遺物実測図 (1:3)



1. 2SYR5/7灰褐色 呈白色粒子 (φ1~3m) 多角形ブロック (φ5~10cm) 多孔性土 しまり良
2. 2SYI/6灰青 常滑色粒子 (φ1~3m) 少量ブロック (φ5~10cm) 少孔質土 しまり良 SD21層土
3. SYI/6灰青 黑滑色粒子 (φ1~3m) 少量土 しまり良
4. 2SYI/1灰灰 黄褐色粒子 (φ1~3m) 多角形ブロック (φ5~10cm) 多孔質土 しまり良 SK1層土
5. 10YR5/7灰青 呈白色 (φ1~3m) 多角形ブロック (φ5~10cm) 多孔質土 しまり良 SD21層土
6. 10YR5/3灰 黑滑色粒子 (φ1~3m) 多角形ブロック (φ5cm) 多孔質土 しまり良 SD21層土
7. 10YR5/3灰 黑滑色粒子 (φ1~3m) 多角形ブロック (φ5cm) 多孔質土 しまり良 SD22層土
8. 10YR2/1黑 黑滑色粒子 (φ1~3m) 多角形ブロック (φ5cm) 多孔質土 しまり良 SD22層土



第16図 SD21遺構平面図 (1:80) 断面図 (1:40) 及び遺物実測図 (1:3)

③井戸

井戸は2基検出している。遺物の出土は見られなかったが、井戸の規模や周辺遺構の立地状況から、中世の可能性がうかがえるものである。

a 第1号井戸 SE1 (第17図)

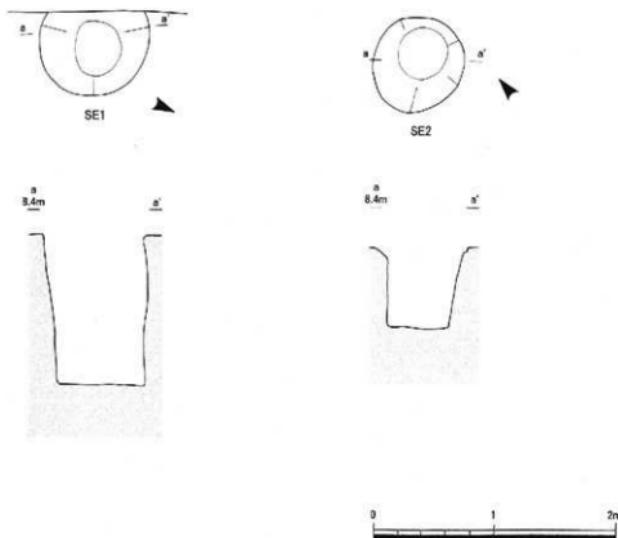
調査区中央で検出した素堀り井戸である。遺構の一部は調査区域外への広がりが見られるものの、確認できた範囲での規模は、長軸0.9m・短軸0.68m・深さ1.22mを測る。平面形は円形である。

遺物の出土はなかった。

b 第2号井戸 SE2 (第17図)

調査区北側で検出した素堀り井戸である。遺構規模は長軸0.76m・短軸0.75m・深さ0.67mを測る。平面形は円形である。

遺物の出土はなかった。



第17図 井戸平面図・エレベーション図 (1:40)

(4) その他の時代の遺構

遺物の出土がなかったため、時期特定ができなかった掘立柱建物 2 棟について記述する。

①掘立柱建物

a 第1号掘立柱建物 SB1 (第18図)

調査区南側で検出した掘立柱建物である。南北棟の側柱建物で、軸方位はN-10°-Eである。柱穴の一部はSD2を切り、SD4に切られる形であった。またSD2の覆土上に立地していたと考えられる柱穴も桁間から推察したが、検出できなかった。遺構は一部に調査区域外への広がりがみられるが、柱間の距離が2m前後、梁行が1.4mである事から、この建物は、桁行4間以上、梁行3間ほどであったと推定する。

柱痕は多くの柱穴で確認でき、柱穴底部には柱が据えられていた窪みの痕も確認できた。

遺物は、柱穴から時期不明の土師質の土器片や、SD2にかかる柱穴内から弥生土器片などが出土している。

弥生土器片については、流れ込みの可能性が高いと思われる。

b 第2号掘立柱建物 SB2 (第18図)

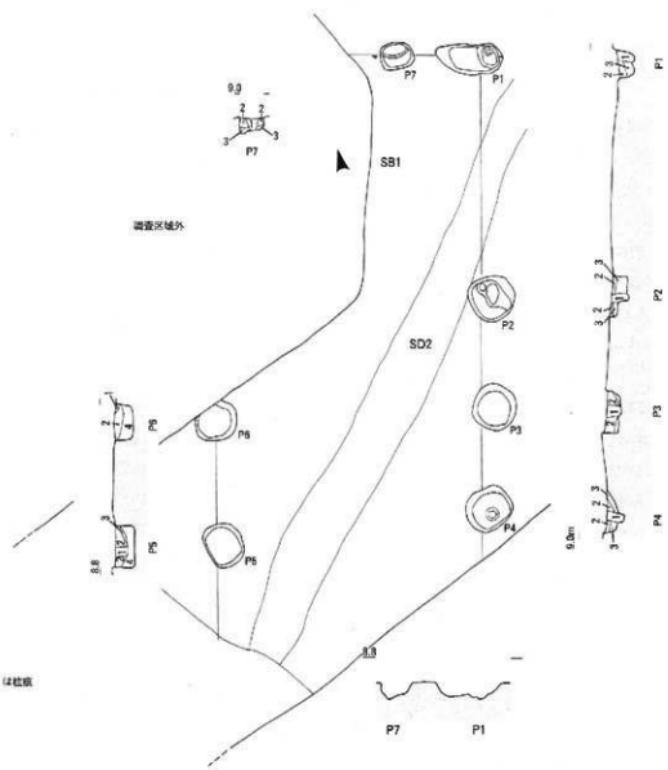
調査区南側で検出した掘立柱建物である。軸方位はN-10°-Eである。柱穴はSD5を切る形で検出し、遺構の大部分は調査区域外へ広がっている。そのため規模などの全体像は不明である。柱間の距離は約3mを測る。

柱穴は全て柱痕が確認でき、P1には柱が据えられていたと考えられる窪みの痕も確認できた。

先述したSB1とは柱間の距離に違いがあるものの、軸方位に類似しており、同時期存在の可能性が考えられる。

遺物の出土はなかった。

(新宅)



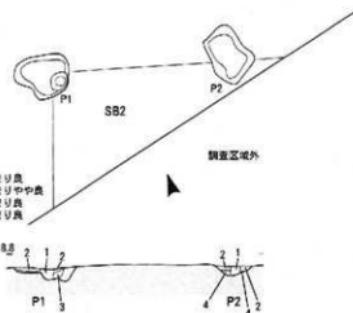
SB1

- 2.5Y4/1黄灰 黄褐色粒子(φ1~3mm)少 粒化物粒子(φ2~3mm)少 粘質土 しまり良
- 2.5Y6/3C1.5 黄褐色粒子(φ1~3mm)少 粒化物粒子(φ2~3mm)少 粘質土 しまり良
- 2.5Y4/2暗灰 黄褐色粒子(φ1~3mm)少 黄白色粒子(φ3mm)少 粘質土 しまり良
- 2.5Y7/4浅黄 黄褐色土を少量含む 粘質土 しまり良

SB2

- 2.5Y4/1黄灰 黄褐色ブロック(φ3~5mm)多 同色ブロック(φ5~10mm)多 シルト しまり良
- 2.5Y3/2黒褐 黄褐色ブロック(φ3~5mm)多 同色ブロック(φ5~10mm)少 粘質土 しまりやや良
- 2.5Y5/1黄灰 黄褐色ブロック(φ3~5mm)多 同色ブロック(φ5~10mm)多 粘質土 しまり良
- 2.5Y7/3浅黄 黄褐色ブロック(φ3~5mm)多 同色ブロック(φ5~10mm)多 粘質土 しまり良

0 2 4m



第18図 SB1・2構造平面図・断面図・エレベーション (1:80)

測定番号	測定項目	表面				測定箇所 部位	底面ワニ 形状	底上	施工条件	坑道	備考
		長軸(cm) 高さ(cm)	短軸(cm) 幅(高さ)(cm)	深さ(cm)	(底面)側面×表面 割合%						
S.P153	穴	—	—	0.25	—	楕円形	A	—	—	—	—
S.P159	穴	0.21	0.21	0.21	—	楕円形	A	土壁面	三箇所切削面	—	—
S.P151	穴	0.2	0.19	0.23	—	方形	A	—	—	—	—
S.P149	穴	0.21	0.22	0.28	—	楕円形	A	—	—	—	—
S.P149	穴	0.17	0.17	0.17	—	楕円形	A	土壁面	三箇所切削面	—	—
S.P149	穴	0.1	0.15	0.19	—	楕円形	A	—	—	—	—
S.P24	穴	0.19	0.27	0.29	—	楕円形	A	—	—	—	—
S.P187	穴	0.33	0.3	0.11	—	楕円形	A	—	—	—	—
S.P193	穴	0.2	0.28	0.11	—	円形	A	—	—	—	—
S.P164	穴	0.2	0.27	0.2	—	楕円形	A	—	—	—	—
S.P196	穴	0.1	0.3	0.69	—	楕円形	A	—	—	—	—
S.P186	穴	0.2	0.16	0.27	—	楕円形	A	—	—	—	—
S.P188	穴	0.37	0.38	0.57	—	楕円形	A	—	—	—	—
S.P193	穴	0.2	0.25	0.65	—	楕円形	A	—	—	—	—
S.P229	穴	0.22	0.11	0.12	—	楕円形	A	—	—	—	—
S.P271	穴	0.31	0.39	—	—	楕円形	A	—	—	—	—
S.P172	穴	—	—	—	—	楕円形	A	—	—	—	—
S.P173	穴	0.14	0.35	0.3	—	方角	A	土壁面	三箇所切削面	—	—
S.P174	穴	0.2	0.3	0.3	—	方角	A	—	—	—	—
S.P125	穴	0.21	0.22	0.1	—	楕円形	A	—	—	—	—
S.P176	穴	0.29	0.25	0.3	—	楕円形	A	—	—	—	—
S.P177	穴	0.29	0.22	0.1	—	楕円形	A	—	—	—	—
S.P178	穴	0.25	0.22	0.1	—	楕円形	A	—	—	—	—
S.P179	穴	0.26	0.25	0.1	—	楕円形	A	—	—	—	—
S.P180	穴	0.29	0.25	0.13	—	楕円形	A	—	—	—	—
S.P181	穴	0.33	0.26	0.3	—	楕円形	A	—	—	—	—

表5 造構観察表④

※上の欄は、TJV有効孔、初期、上部端子の初期開口に付与され、初期孔。初期孔の初期開口寸法

TJV半径2倍。初期、上部端子の初期開口寸法をもつて初期孔とする。初期孔の初期開口寸法

圆盤番号	出土位置	種別	工程	法量		備考
				全長(cm)	幅(cm)	
11-18	SD3	管玉	未製品	1.0	0.2	緑色凝灰岩・表1に明記
	SD3	管玉	未製品	0.7	0.4	緑色凝灰岩・表1に明記
	SD3	—	形削工程	1.0	0.4	緑色凝灰岩
	SD3	—	荒削工程	1.8	1.0	緑色凝灰岩
	SD3	—	形削工程	1.4	0.6	緑色凝灰岩
	SD3	—	荒削工程?	2.1	1.8	緑色凝灰岩
	SD3	—	荒削工程?	1.5	0.7	緑色凝灰岩
	SD3	—	荒削工程?	1.6	1.3	鉄石英
	SD3	—	荒削工程	2.0	1.6	緑色凝灰岩
	SD3	—	研磨工程	1.0	0.5	緑色凝灰岩
	SD3	砾石	—	5.7	4.2	軽石
	SD3	砾石	—	8.7	0.8	軽石
11-19	SI1	管玉	未製品	0.4	0.2	穿孔工程・緑色凝灰岩
	SI5	—	形削工程	1.1	0.3	緑色凝灰岩
	SI5	砾石	—	9.8	3.1	滑石
	SD10	砾石	—	8.5	2.0	滑石

表6 玉・石製品観察表

図版番号のないものは開拓外造物である。

工程は 中野由紀子氏(1999)に準じた。

III まとめ

本江畠田Ⅰ遺跡の調査は、今回の調査で2回目を数える。前回の調査地点では、縄文時代晩期や弥生時代後期、さらに古墳時代前期、古墳時代中期、中世などの広い時代幅の遺構や遺物が検出、出土している。この調査の結果や試掘結果から、本遺跡の集落の本体は今回の調査区の北東側に広がりが想定されている。この北東側（現建設会館敷地内）には、以前古墳が存在していたとされ（大門町2005）、この周辺の古墳時代の遺構との関係が興味深いところである。

今回の調査では、遺構や出土遺物などに前回の調査結果に類似する点が多く見られ、本遺跡が包蔵する遺構の時代的な繋まりが垣間見る事ができたとともに、前回の調査で指摘されていた弥生時代の集落の中心についても、今回の調査から調査区南側に弥生時代後期後半からの遺構が集中する結果を得る事ができ、さらに確認を得る結果であった。

遺構の時期については、弥生時代は法式～月影式段階のものが大半を占め、一部に古墳時代前期や中世の遺構が見られている。

遺構は南側調査区で集中して見られ、竪穴建物が4棟と溝を検出している。時代は弥生時代終末期のものが中心であった。狭小な面積での検出であったため全体像を把握できた遺構はないが、どの遺構からも緑色凝灰岩の剥片や菅玉の未製品が出土している。しかし出土状況や遺構の掘り込みの深さから見て、竪穴建物に伴う物と判断出来るものはない。唯一確実に言える遺構はS D 3である。この遺構からは多量に剥片が出土し、少量ではあるが菅玉の未製品も出土している。堆積は自然堆積と云うより人為的堆積を推察させる様な堆積であった。出土地点もS 1 3と前後関係が見られた箇所周辺からの出土が顕著であった事から、散発的なものではなかった。また製品や未製品の出土が少なかった事から、ある一定箇所での廃棄行為の存在がうかがえ、さらに今回検出の竪穴建物からは明確な判断を下せなかつたが、この遺構の周辺に丁房跡の存在を看取せるものである。本遺跡周辺では、本田宮田遺跡で玉関係遺物の出土を見ており、本江畠田Ⅰ遺跡との関係が興味深いものである。

（新宅）

引用・参考文献

- （財）大阪府文化財センター 2003『古墳出現期の土師器と実年代 シンポジウム資料』
大門町町史編集室 2005『大門町史 続巻』
大門町教育委員会 1997『大門東部地区埋蔵文化財発掘調査報告』
大門町教育委員会 1997『本江畠田Ⅰ遺跡発掘調査報告』
大門町教育委員会 2005『二口油免遺跡発掘調査報告（4）』
富山考古学会 1999『富山平野の出現期古墳 発表要旨・資料集』
中野由紀子 1999『富山県の菅玉製作について』『富山考古学研究 紀要 第2号』
（財）富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所
吉岡康暢 1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館

IV 自然科学分析 本江畠田 I 遺跡出土の種実遺体

中村 亮仁

1. 試料と結果

試料は本江畠田 I 遺跡 SD03 (月影式併行期) 出土の種実遺体で、水洗選別済みの試料であった。同定は肉眼及び双眼立体顕微鏡下で現生標本との対比を行った。結果はイネの1分類群が同定された。炭化果実(炭化米)は、完形で126個体が確認され、1/2以下の個体も3個体含まれていた。同定された個体はいずれも炭化した状態であり、全体的に発泡し焼き太りしている個体が20個体含まれていた。イネ炭化果実は、胚が欠落している個体のみが確認されている。以下に、同定された分類群の形態的特徴について記載し、結果を一覧表(表1)にまとめた。また、1/2以下の個体、焼き太りした個体などを除く106個体については、その計測値を表(表2)に示した。計測は、0.1mmまで測れるルーペで行った。

記載: イネ *Oryza sativa* L. 炭化果実

黒色で、橢円形を呈する。下端の胚の部分はややくぼむ。表面には縦方向に数条の溝が走る。

表1

分類群(和名 / 学名)	産出部位	個数
イネ <i>Oryza sativa</i> L.	炭化果実 完形	126
	1/2 残存	3

2. 所見

同定されたイネ炭化果実の計測値(表2)をみると、粒長の平均値が4.52mm、最大5.1mm、最小3.6mm、粒幅の平均値が2.71mm、最大3.7mm、最小2.0mm、粒厚の平均値が1.88mm、最大2.7mm、最小1.4mmであった。また、粒長と粒幅の散布図(図1)をみると比較的まとまりのあることが看取できる。炭化米については佐藤の研究³があり、ここでは佐藤の基準に準拠して比較してみることにする。まず、粒形を表す粒長×粒幅の平均値は1.69、最大2.23、最小1.13、粒の大きさを表す粒長×粒幅の平均値は12.28、最大17.76、最小7.4であった。粒形(粒長/粒幅)をグラフ(図2)に表すと、ほぼ正規分布を示した。1.1~2.2の範囲内で分布しており、円粒(～1.4)が14個体、短粒(1.4～2.0)が90個体、長粒(2.0～)が2個体でそのほとんどが短粒の範囲におさまる。また、粒の大きさ(粒長×粒幅)については8以下の極々小粒が1個体、8～12の極小粒が44個体、12～16の小粒が57個体、16～20の中粒が4個体であり、これは、極小粒～小粒に多く分布する傾向にある。

イネ炭化果実(炭化米)は弥生時代以降、集落遺跡から普通に検出される栽培植物であり、本江畠田 I 遺跡においてもイネが積極的に利用されていたことが想定される。また、イネ炭化果実は焼き太りなど発泡している個体が見受けられた。これはイネ炭化果実が堆積後に土中で焼成作用によって炭化したことを意味するのではなく、堆積する前に被熱し、その結果炭化したことが考えられよう。

註 佐藤敏也 1988 「弥生のイネ」『弥生文化の研究 2 生業』雄山閣

参考文献

粉川昭平・吉井亮一 (1984)「江上遺跡群出土の植物遺体」『北陸自動車道遺跡報告—上市町木製品・総括編—』

富山県教育委員会

中村亮仁 (2001) 「下老子笛川遺跡出土の種実遺体(2)－弥生時代の建物から出土した種実遺体について－」

『富山考古学研究』紀要4号 財團法人富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所

表2 本江畠田I遺跡出土イネ炭化果実計測値一覧

No.	粒長(mm)	粒幅(mm)	粒厚(mm)	粒長/粒幅	粒長×粒幅	No.	粒長(mm)	粒幅(mm)	粒厚(mm)	粒長/粒幅	粒長×粒幅
1	4.8	2.7	1.9	1.79	12.88	54	4.9	2.5	1.6	2.13	11.27
2	4.8	3.6	1.9	1.33	17.82	55	4.5	2.4	1.7	1.88	10.80
3	4.7	2.8	2.2	1.68	12.65	56	4.5	2.4	2.1	1.9	1.78
4	4.7	3.7	1.8	1.28	12.69	57	5.0	3.0	2.2	1.67	15.00
5	5.1	2.6	1.9	1.96	12.26	58	4.9	2.7	1.7	1.77	12.15
6	4.4	2.9	1.9	1.52	12.76	59	4.8	2.7	2.0	1.79	13.48
7	4.8	2.9	2.0	1.66	13.82	60	4.4	2.5	1.9	1.89	11.95
8	4.9	3.4	2.2	1.44	16.66	61	4.0	2.9	2.2	1.39	11.85
9	4.5	2.8	2.1	1.61	12.80	62	4.6	2.8	1.7	1.64	12.88
10	4.6	2.8	2.0	1.64	12.88	63	3.9	2.4	1.8	1.63	9.36
11	4.8	2.8	1.9	1.71	12.44	64	4.7	2.6	1.8	1.61	13.22
12	4.5	3.7	2.3	1.30	17.76	65	3.9	2.9	2.1	1.34	11.31
13	5.0	2.8	1.8	1.79	14.00	66	4.5	2.7	1.9	1.67	12.15
14	4.8	2.7	2.0	1.78	12.88	67	4.6	2.8	1.9	1.84	12.88
15	4.3	2.6	2.1	1.68	11.18	68	4.7	2.8	1.9	1.81	12.22
16	4.6	3.7	2.3	1.24	17.62	69	4.1	2.3	1.6	1.78	8.43
17	4.3	2.7	2.0	1.59	11.81	70	4.0	2.9	2.0	1.38	11.80
18	4.8	2.8	1.9	1.71	13.44	71	4.3	2.4	2.1	1.79	10.32
19	4.4	2.8	1.9	1.57	12.32	72	4.2	2.6	1.7	1.62	12.92
20	4.9	2.9	2.0	1.69	14.21	73	4.2	2.7	2.0	1.56	11.34
21	4.7	2.7	2.1	1.74	12.69	74	4.2	2.4	1.5	1.75	10.08
22	4.9	2.9	1.9	1.75	13.73	75	4.9	2.2	1.9	2.23	10.78
23	4.6	2.8	2.0	1.84	12.88	76	3.8	2.3	1.8	1.65	8.74
24	4.9	2.8	1.7	1.75	13.72	77	4.4	2.5	1.7	1.76	11.00
25	4.8	2.9	2.4	1.89	14.21	78	4.6	2.3	1.5	2.00	10.58
26	5.0	2.8	1.8	1.72	14.93	79	4.8	2.5	1.7	1.92	12.00
27	5.1	2.6	1.8	1.86	13.26	80	3.8	2.9	2.0	1.31	11.02
28	4.8	3.5	1.8	1.34	15.00	81	3.8	2.5	1.9	1.44	9.00
29	4.5	2.6	1.8	1.72	11.93	82	4.7	2.7	1.7	1.74	12.69
30	4.8	3.9	1.8	1.58	13.34	83	3.9	2.6	1.8	1.50	10.14
31	4.8	2.5	2.0	1.92	12.05	84	3.7	2.0	1.8	1.85	7.40
32	4.3	3.4	2.0	1.26	14.62	85	4.3	2.7	2.1	1.58	11.61
33	4.9	2.8	1.7	1.75	13.72	86	4.5	2.6	2.0	1.23	11.70
34	4.8	2.9	1.8	1.66	13.82	87	4.3	2.7	2.0	1.58	11.81
35	4.7	2.7	1.8	1.74	12.89	88	4.0	2.6	1.6	2.00	8.05
36	4.2	2.4	1.8	1.75	10.96	89	4.7	2.9	1.9	1.82	15.85
37	4.6	2.8	1.9	1.64	12.88	90	4.9	2.6	1.6	1.89	12.74
38	4.5	2.5	1.8	1.80	11.25	91	4.7	2.9	1.9	1.62	15.83
39	5.0	2.5	1.7	2.00	12.50	92	4.9	3.6	1.8	1.36	17.94
40	4.8	2.8	1.8	1.71	13.44	93	4.2	3.3	2.3	1.27	13.86
41	4.2	3.7	1.9	1.14	15.54	94	4.5	2.5	1.7	1.80	11.25
42	4.6	2.7	1.8	1.70	12.42	95	4.2	3.4	1.8	1.24	14.28
43	4.0	2.5	1.8	1.60	10.00	96	4.0	2.4	1.7	1.67	9.60
44	5.0	2.8	1.9	1.79	14.00	97	4.5	2.5	1.8	1.80	11.25
45	4.5	2.4	1.8	1.88	10.80	98	4.8	2.4	2.0	2.20	11.52
46	4.4	2.8	1.7	1.57	12.32	99	4.2	2.2	1.7	1.91	9.24
47	4.9	2.7	1.9	1.81	13.23	100	4.4	2.6	1.7	1.89	11.44
48	4.3	2.7	1.9	1.56	11.61	101	4.5	2.6	1.8	1.79	11.70
49	4.4	2.3	1.4	1.81	10.12	102	5.0	2.8	1.7	1.79	14.00
50	4.5	2.8	1.7	1.53	12.00	103	4.2	2.7	1.7	1.56	11.34
51	4.8	2.7	2.0	1.70	12.76	104	4.3	2.5	1.9	1.72	10.75
52	4.3	2.9	1.9	1.72	10.79	105	4.5	2.8	2.0	1.61	12.60
53	4.5	2.7	2.0	1.67	12.15	106	4.4	2.6	2.0	1.69	11.44
平均値											
4.92											

図1 イネ炭化果実粒長と粒幅の散布図

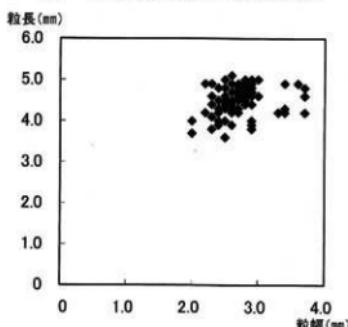
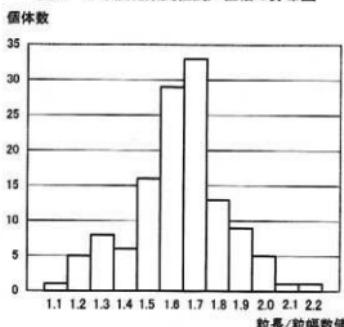


図2 イネ炭化果実粒長／粒幅の分布図





調査区全景（北から）



調査区全景（南から）

図版
2



SI 1 完掘（東南から）



SI 2 完掘（北西から）



SI 3 完掘（北西から）



SI 5 完掘（南から）



SK15完掘（西から）



SK19完掘（南から）



SD 5 完掘（南から）



SD 3 完掘（南東から）



SD 2 完掘（東から）



北側調査区全景（北東から）



SD22完掘（南から）



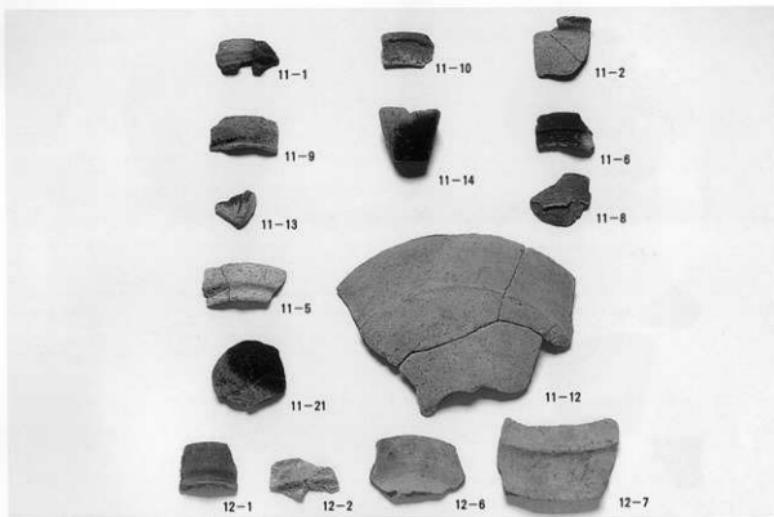
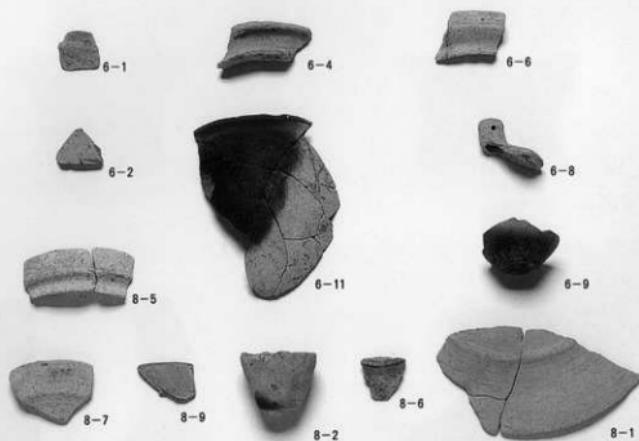
SB 1 全景（南西から）



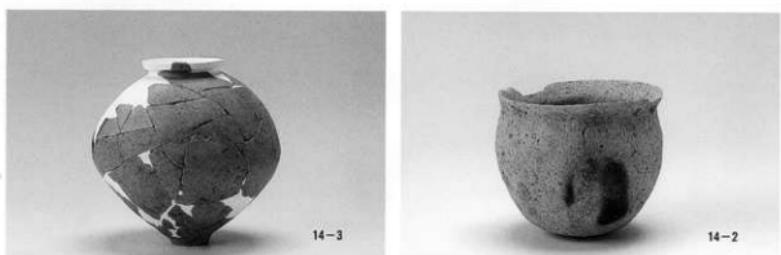
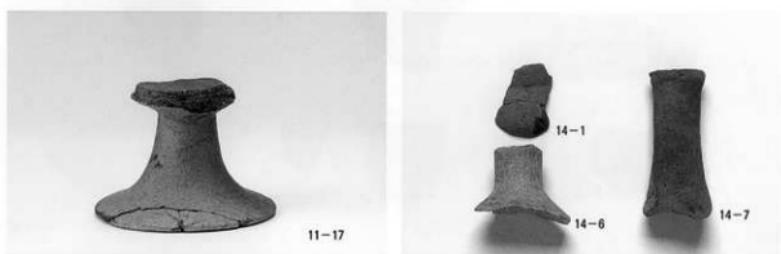
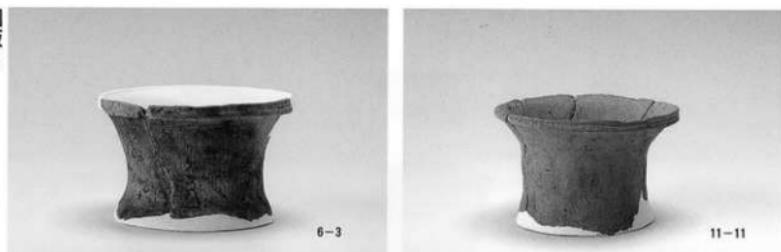
SB 1 完掘（南西から）



SB 2 全景（北西から）



遺構内出土遺物



遺構内出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ほんごうはたけだいちいせきはくつちょうきほうこく とちくかくせいろじぎょうにともなうはくつちょうきほうこく							
書名	本江畠田 I 遺跡発掘調査報告（2）－土地区画整理事業に伴う発掘調査報告－							
シリーズ名	大門町埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	22							
編著者名	尾野寺克実 新宅輝久 藤田慎一							
編集機関	大門町教育委員会 株式会社中部日本鉱業研究所埋蔵文化財調査室							
所在地	富山県高岡市西藤平蔵581							
発行年月日	2005年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ○○°	東経 ○○°	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ほんごうはたけだいち 本江畠田 I	だいもんまちはんごう 大門町本江	16382	057	36°43'09"	137°03'08"	20041026 ～ 20050331	1350m ²	土地区画整備事業に伴う発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
本江畠田 I	集落	弥生 古墳 中世	竪穴建物 掘立柱 建物 土坑 溝	弥生土器・管玉・磁石・土師器・珠 洲			弥生時代後期後半から 終末期にかけての溝や 竪穴建物の覆土より管 玉の未製品が出土して いる。	

大門町埋蔵文化財調査報告22集

本江畑田Ⅰ遺跡発掘調査報告(2)

土地区画整理事業に伴う発掘調査報告

発行日 平成17年3月

発行 大門町教育委員会

編集 大門町教育委員会

株式会社中部日本鉱業研究所

印刷 とうざわ印刷工芸株式会社

